白洲正子と歩く琵琶湖

《江南編・カミと仏が融けあう処》

大沼芳幸 著

海青社

はじめに

随筆家〝白洲正子（1910～1998）〟は近江を深く愛し、紀行文を中心とする作品の多くに、近江をとりあげた。なぜ、彼女は近江に魅せられたのか？もはやそれは作品から読み解くしか術はないが、おそらく琵琶湖を中心とした近江の自然に宿る〝気配〟が彼女を惹きつけたのではないか、と思っている。自然の気配とは、〝自然に宿るカミ〟と言い換えた方が適切かもしれない。この自然信仰といっても良い彼女の感性は、西国巡礼により開花したと自ら語っている。**今はまったく地上から消えうせたように見える（日本の）神々が、観音様の衣のかげから、ふと顔をのぞかせることに驚いている**〔西国巡礼：岩間寺〕と、仏教の神の中に取り込まれながらも、したたかに日本人の精神（こころ）の中に生き続ける日本のカミの姿を印象深く綴った。

湖面に映る朝日

▲神の宿る三上山

白洲正子が、この自然信仰に目覚めたのは、1960年代前半、日本中が東京オリンピックの開催に沸き立ち、文明の力が、日本人が失ってはならない文化すら押し潰しつつあった時代である。この時、彼女は作品を通して、自然という日本の古いカミの姿を通して、文化を失うことに対する痛烈な警鐘を鳴らした。

そして現在、日本は成長と挫折を経験すると同時に、自然の猛威にもさらされ、文明の放つ力の危うさに気付いたかに見えた。しかし、再び過去と同じ喧騒が日本を包もうとしている。このような時代に白洲正子の作品は当時と同じ、いや、もっと大きなメッセージを日本に問いかけているように感じる。そして、現代に不安を懐き、人として本来あるべき姿を求める多くの人たちが、彼女の作品に反応し、その舞台となった近江の地を訪れている。幸い、近江の地には、彼女がその感性を涵養した時とほぼ変わらず、ゆったりと回帰しながら〝文化の時間〟が

▲比叡の木漏れ日

流れている。

本書は、白洲正子の作品と、近江の自然や風土から〝安らぎ〟と〝気づき〟を求めようとする方々との橋渡しをすることを目的に執筆した。よって、〝カミ〟〝仏〟〝自然〟〝暮し〟の視点から、彼女の作品に登場する場所および、関連する場所を取り上げ、筆者の感性を交え、ここに継承された文化について解説を加えた。テーマを絞っても近江の文化は深く、簡潔に解説しても大部となるため、江南(こうなん)編・江北(こうほく)編の2分冊とした。通常、近江は湖南・湖東・湖北・湖西に分けて紹介することが多い。しかし、文化は有機的に、しかも重層的に絡まりあいながら継承されてきたものであるから、地域を明確に区分することは困難であるし、さほど意味を持たない。よって、歴史的な南北境の表現である江南と江北にした。その境界は時代によって異なるが概ね、旧犬上郡・神崎郡・蒲生郡の辺りである。

この江南編では、自然に宿るカミの姿と、カミと仏が融合する姿を紹介する。江北編では、自然というカミに守られる暮らし、そして、仏の姿を纏った十一面観音、さらに、琵琶湖に集う水を祀る祭場等について紹介する予定である。

本書が、自然と共に生きる人間、いや、自然に生かされている人間という、当たり前の姿を見直すきっかけとなれば幸いである。

白洲正子 オンライン ガイドマップ

JR琵琶湖線 沿線

1. 岩間寺 (A6) p.74
2. 富川磨崖仏 (B7) p.122
3. 三上山 (B6) p.29
4. 長命寺 (C5) p.86
5. 奥島山 (C5) p.25
6. 伊崎寺 (C4) p.70
7. 龍王寺 (C5) p.108
8. 御澤神社 (C5) p.111
9. 桑實寺 (C5) p.99
10. 奥石神社 (C5) p.94
11. 石馬寺 (C5) p.95
12. 観音正寺 (C5) p.91
13. 西明寺 (D4) p.103

JR草津線 沿線

14. 大野神社 (B6) p.128
15. 金胎寺 (B6) p.129
16. 金勝寺 (B6) p.130
17. 狛坂磨崖仏 (B6) p.131
18. 廃少菩提寺 (C6) p.148
19. 善水寺 (C6) p.136
20. 岩根不動寺・磨崖仏 (C6) p.136
21. 飯道山 (C6) p.33
22. 息障寺 (C7) p.139

近江鉄道 沿線

23. 油日神社 (D7) p.37
24. 太郎坊宮 (C5) p.16
25. 船岡山 (C5) p.21
26. 紅かす山 (C5) p.21
27. 岩戸山 (C5) p.21
28. 石塔寺石造三重塔 (D5) p.150

JR湖西線 沿線

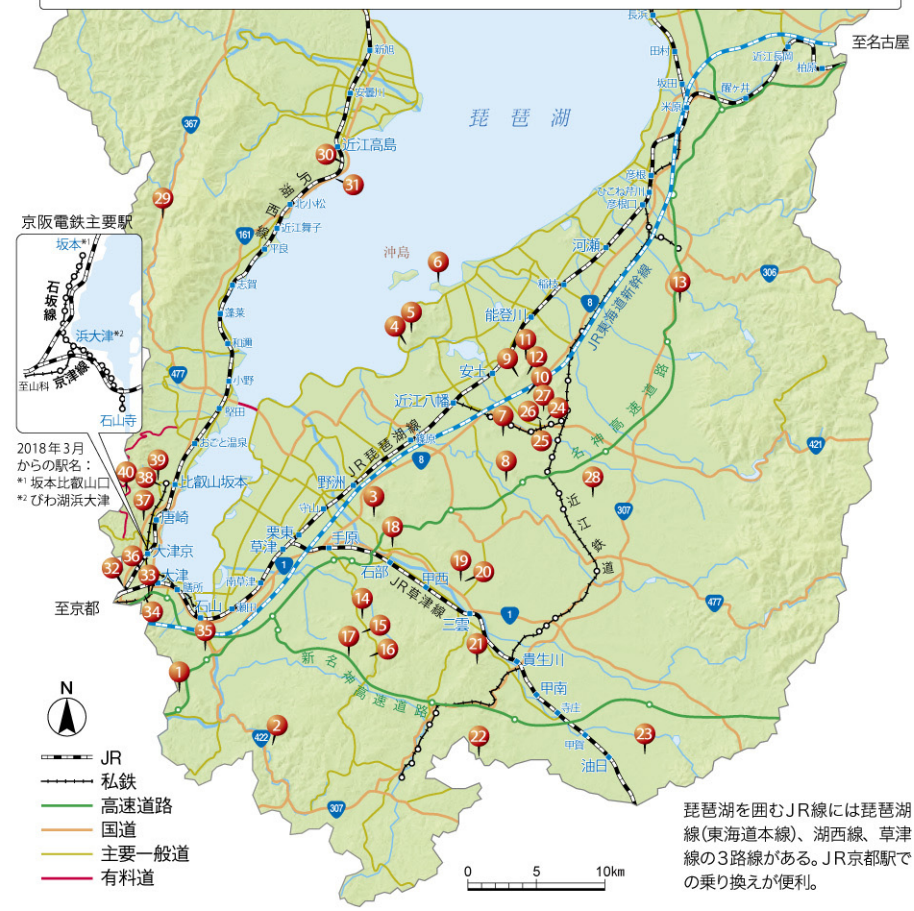
29. 葛川明王院 (A4) p.61
30. 鵜川四十八躰仏 (B4) p.143
31. 白鬚神社 (B4) p.56

京阪電鉄 (京津線) 沿線

32. 寂光寺磨崖仏 (A6) p.118
33. 関寺の牛塔 (A6) p.154
34. 蝉丸神社 (A6) p.156

京阪電鉄 (石坂線) 沿線

35. 石山寺 (B6) p.77
36. 三井寺 (A6) p.82
37. 志賀の大仏 (A6) p.140
38. 慈眼堂 (A5) p.143
39. 日吉大社 (A5) p.42
40. 延暦寺 (A5) p.54



琵琶湖を囲むJR線には琵琶湖線(東海道本線)、湖西線、草津線の3路線がある。JR京都駅での乗り換えが便利。

白洲正子と歩く琵琶湖

《江南編・カミと仏が融けあう処》

目　次

はじめに……1
白洲正子オンラインガイドマップ……4
序章　カミと仏の出会う処　近江……9
一　日本人の精神文化の基層……10
二　近江に坐す物言わぬ神々……12
三　カミと人間……13
四　カミと仏の融け合う処……14
第一章　自然に宿る近江のカミ……15
一　太郎坊宮とこれを取り巻く山のカミ……岩に宿る母性……16
二　船岡山から岩戸山十三仏……大きな祀りと小さな祀り……21
三　奥島山……湖（うみ）を見護る磐のカミ……25
四　三上山……山を祀る……29
五　飯道山……カミが神となる時……33
六　油日神社……降臨し祝福をもたらす神……37
七　日吉大社……女神と御生れ……42
第二章　カミと仏の融け合う処……51
一　比叡山と最澄……比叡に招かれた湖のカミ……52
二　葛川明王院と回峰行……祈りに感応するカミ……61

三　伊崎寺……生身の不動明王の祈り……70
四　岩間寺……霊木から顕現したカミ……74
五　石山寺……磐に宿るカミを祀る寺……77
六　三井寺……地の水を祀る寺……82
七　長命寺……自然物に宿る観音様……86
八　観音正寺……里に招かれた磐のカミ……91
九　石馬寺……山頂のカミ、山腹のカミ……95
十　桑實寺……磐に降り立つ琵琶湖のカミ……99
十一　西明寺……池から湧出した仏の寺……103
十二　龍王寺……水神と人の交わり……108

第三章　近江に宿る石の文化……113

一　寂光寺磨崖仏……磐に顕現した仏たち……118
二　富川磨崖仏……不動明王は何処に？……122
三　金勝と狛坂磨崖仏……水のカミが宿る山と磐……128
四　岩根山の摩崖仏……水源を護る磐の仏……136
五　志賀の大仏（おぼとけ）……街道を護る磐の仏……140
六　鵜川四十八躰仏と慈眼堂……変る形、変らざるカミ……143
七　廃少菩提寺石多宝塔……カミに戻る石たち……148
八　石塔寺石造三重塔……風土に融け込む異国……150
九　関寺の牛塔……柔らかく暖かい石の造形……154

このプレビューでは表示されない頁があります。

一　太郎坊宮とこれを取り巻く山のカミ
……岩に宿る母性

日本人は、森羅万象万物にカミが宿ると考えている。一方、人の暮らしに大きな恵をもたらしてくれる力を持つカミは、とりわけ大きな処に宿るとも感じている。大きな処とは、自然の大きな変曲点、例えば山頂、それも秀麗な山の山頂。巨巌、巨木、水源、瀧、川の合流点、岬、海(湖)等である。

特に山に対し白洲正子は、**もともと色々なものを生む山には、母性神の性格があり**〔近江山河抄：伊吹の荒ぶる神〕、**日本人にとって、自然の風景というものは、思想をただし、精神をととのえる偉大な師匠であった。そして、その中心になる神山、生活にもっとも必要な木と水を生む山が、女体にたとえられたのは当然であろう**〔近江山河抄：日枝の山道〕と表現しているように、様々な恵をもたらす本源とした。そして山の力は、生み出す力としての母性に結

▲太郎坊山全景　太郎坊山は、円錐状の典型的な神奈備型の山である。山上の折り重なる磐に今なおカミの宿りを感じさせる。

▲男磐・女磐　山の芯から割れた磐が作り出した自然の造形であるが、その形状は母性をイメージさせる。奥に本殿が見える。胎内を通る参道は、礼拝者が現世に生まれ変わる産道でもある。

びつく。この山と母性を結び付けた感性が、白洲正子の自然信仰の基層をなしている。

東近江市八日市に太郎坊山という、典型的な神奈備型の山が屹立している。この山には自然に対する信仰の諸相が、凝縮して伝えられている。

縁起に拠れば、〝昔、伝教大師最澄が琵琶湖の岸を歩いていると、東の山に紫雲がたなびいているのが見えた。怪しんだ最澄がこの地にやって来た。すると、不動明王のような天狗が現れ、この山を祀ることを告げる。これに応えて最澄は、薬師如来を本尊とする「成願寺」をひらき、この山の大磐を奥の院として祀った〟現在の太郎坊山の信仰は明治の神仏分離令により著しく変容しているが、元々は、山に対する自然信仰と仏教とが混在していた。**八日市の近く、太郎坊の山頂にも「夫婦岩」と名づける巨巌があり、二つの岩の間に、人がようやく通れるほどの参道が通っていて、その向うに本殿がのぞめる。いうまでもなく、一種の「体内信仰」で、ここでも女体が象徴されているが、後に山伏信仰に発展したため、原始の姿は失われた**〔かくれ里：石をたずねて〕。

急な石段を息を切らせて登ると、眼前に巨大な二枚の磐が現れる。右手の磐が「男磐」、左手の磐が「女磐」と呼ばれている。この二枚の磐の間に人がやっと通れる程の隙間があり、これが奥に鎮座する「阿賀の神（元々は太郎坊山のカミ）」への参道になってい

このプレビューでは表示されない頁があります。

二　船岡山から岩戸山十三仏
……大きな祀りと小さな祀り

琵琶湖の東岸には、太郎坊山のような独立峰がいくつも聳え、独特の景観を形成している。これは、かつてこの地が、古琵琶湖であった時代に削り残された島の姿である。従って、多くは磐で形成され、至る所に巨巌が露頭し、これが自然信仰の対象となっている。

太郎坊山に連なるこれらの山にも、太郎坊に類似する自然に対する信仰が残されている。近江鉄道の市辺駅の北に船岡山と呼ばれる山（岡）がある。ここに祀られているのが太郎坊と同じ「阿賀神社」で、同様に、大きな磐に挟まれるように社殿が鎮座し、太郎坊の田宮として信仰されている。

歩を北に進めると、紅かす山と呼ばれる低いながらも美しい円錐形の山がある。この山の山頂にも磐が露頭し、この磐に紅白の晒しが巻かれ、様々な神

▲船岡山・紅かす山　かつて、この地が琵琶湖の底であった時、水の流れに削り残された島がこの様な独立丘陵の連なりとなって残された。山上はいずれも、神を祀る聖地となっている。

このプレビューでは表示されない頁があります。

一　比叡山と最澄

……比叡に招かれた湖のカミ

冒頭でも紹介したように、白洲正子は、日本人の信仰は、森羅万象万物（しんらばんしょうばんぶつ）にカミが宿ると感じる自然信仰に、外来の仏教の神であるホトケが溶け込んで形成されたと見抜いた。そして所謂、本地垂迹説（ほんちすいじゃくせつ）は、仏教者が唱えた概念であるから、仏が主となり語られるが、実は、「黙して語らぬ木や石に宿る」日本のカミは、したたかに、生き続け、仏の影から、日本文化の形成と継承に影響を与え続けている。と語っている。この、日本のカミと仏教のホトケとの融合を試みたのが、奈良時代から平安時代初期にかけて、母なる山に籠もり、その力を得ようとした修行僧たちであり、その代表が伝教大師最澄である。

最澄は、奈良時代に、琵琶湖の水運に関わる、渡来系氏族の三津首百枝（みつのおびともえ）の子として、比叡山麓の坂本で生まれた。十三才で出家した最澄は仏教者として

▲琵琶湖から望む比叡山　比叡山に夕日が沈んでいく。琵琶湖に宿る水のカミ、そして太陽のカミ薬師が、生き物たちを見守る一日を終え、そして繰り返される明日に向けて、暫しの休息に入ろうとする瞬間。感謝。

このプレビューでは表示されない頁があります。

六　三井寺……地の水を祀る寺

天台宗寺門派の総本山である園城寺は、琵琶湖をのぞむ丘陵上に、壮大な伽藍を構えている。寺名の由来は〝弘文天皇の親王である与太王（よたおう）が、父の菩提を弔うため寺の建立を天武天皇に願い、許された。王は、自分の御園に天智天皇が招来した弥勒菩薩の像を迎え、寺院を建立した。よって園城寺と呼ばれるようになった。〟また、〝境内から天智・天武・持統三帝の産湯に使った霊水が湧き出ることから「三井寺」とも呼ばれる。〟とも伝えられている。

現在の寺観は、豊臣秀吉による闕所令（けっしょれい）により完全に破壊されたものを、秀吉の死後に豊臣一族や徳川幕府により復興した姿である。

近江八景「三井晩鐘」のモチーフとなった鐘楼を過ぎると、巨大な本堂が目に飛び込む。本尊は絶対秘仏として鄭重に祀られる弥勒菩薩である。そして、本堂の左手に目を移すと、美しい小さなお堂が

▲三井寺の本体でもある長等山　三井寺の背後に、たおやかに聳える山が長等山である。三井寺は円珍により、本格的寺院としての歩みを始めるが、大元は、この山に由来する自然のカミがもたらす恵、特に水の恵への祈りであったと考えられる。

このプレビューでは表示されない頁があります。

七　長命寺……自然物に宿る観音様

白洲正子は、**近江の中でどこが一番美しいかと聞かれたら、私は長命寺のあたりと答えるであろう**〔この項の引用は全て、近江山河抄：沖つ島山〕と、長命寺周辺に広がる水郷景観の美しさについて語っている。ごく最近まで、長命寺がある奥島山は、琵琶湖と内湖に囲まれた大きな島で、長命寺は、船で参詣する寺であった。残念ながら干拓により変容してしまったものの、琵琶湖と一体となった長命寺とこの周辺の景観は、今なお人々を魅了し続けている。

長命寺は、武内宿禰（たけのうちのすくね）や聖徳太子の開基伝説を伝える古い寺で、今も、善男善女の参詣が絶えないが、この寺もまた、カミと仏との交わりにより生まれた。八百八段の石段を息を切らせて登ると、目の前にゆったりとした大屋根が美しい本堂が現れる。そして、その内陣に安置された厨子には、本尊として十一面観音、千手十一面観音、聖観音の三体の観音

▲観音浄土琵琶湖と長命寺　砂漠に浄土はない。浄土とは水のある世界、それも真水の世界でなければならない。そのように考えると琵琶湖は正に浄土であり、琵琶湖に浮かぶ島を補陀落山と感じ、観音様を迎えた心情は、宜なるかなである。

このプレビューでは表示されない頁があります。

▲蒲生野に建つ龍王寺　白洲正子は、この雪野山と日野川に挟まれた狭隘な平地こそ標野であると考え、この周辺に蒲生野を想定した。瓦屋根が龍神の伝説を伝える龍王寺である。

十二　龍王寺……水神と人の交わり

あかねさす　紫野行き　標野行き
　野守は見ずや君が袖振る

額田王（ぬかたのおおきみ）

紫草の　にほへる妹を　憎くあらば
　人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

大海人皇子（おおあまのみこ）

万葉集を代表するこの相聞歌から『近江山河抄「あかねさす紫野」』の章が始まる。白洲正子はこの相聞歌を、**とかく私たちは万葉調には弱い。「あかねさす」とか、「にほへる妹」などの詞に、テもなく参ってしまう**〔こ

▲龍王寺の伽藍　雪野山の麓には、雪野寺という行基開基の伝説を持つ寺院があったが、度重なる火災などで荒廃し、これを平安時代に再興したのが現在の龍王寺の元となった。

このプレビューでは表示されない頁があります。

第三章

近江に宿る石の文化

前章では、主に江南を舞台に、日本の古いカミが、仏教と共にやってきた新しい神と交渉し、融け合う様を、寺院や神社等の空間を舞台に、白洲正子の作品を通して見てきた。この章では、カミと仏が融合した結果、生まれた造形を紹介したい。具体的には仏像や仏塔となるが、これらは、見えざるカミの姿を可視化させるために生まれた作品、と評価することができる。そして、これらの作品を生み出すための素材として選ばれたのが、「石」と「木」である。両者とも、神の依代（よりしろ）となることにおいて共通するが、耐久性において大きく異なる。木は弱く、これに永続性を与えるためには、仏堂という施設を必要とする。これに対して石は堅牢で、野外に安置することができる。この章では、主に石に込められたカミと仏との交渉の姿を紹介する。木に刻まれ、仏像となった姿については、江北編で紹介することとする。

▲巨巌の露頭　カミは何処にでも漂うが、人と交渉するためにはその依代を必要とする。大地の特異点である巨巌の露頭は、神の依代として相応しいと意識された。［大津市：千石磐］

近江の枕詞として、琵琶湖に由来する「さざなみの」があるが、「石走（いわばし）る」もよく使われる。このことは、近江という国を象徴するものとして、琵琶湖、そして、石がある、と認識されていたことを示す。確かに近江には、優れた石の美術品が多く伝えられている。そして白洲正子は、近江の石の美しさに魅せられた。

近江には奈良や京都に匹敵する美術品はないと書いたが、石造美術だけは別である。美しい石材に恵まれていたのと、帰化人の技術が手伝ったに違いな

このプレビューでは表示されない頁があります。

五　志賀の大仏（おぼとけ）
……街道を護る磐の仏

摩崖仏が、大地に根を下ろした磐に刻まれた造形とするならば、石仏は、移動可能な岩に刻まれた造形である。多くの場合、その名の通り仏教的な造形となるが、その裏に潜んでいるのが、磐に宿る日本のカミであることは、摩崖仏と変わらない。**近江には、優れた石仏が多く、狛坂廃寺の石仏（奈良時代）をはじめ、花園山中の不動明王（鎌倉）、比叡山西塔の弥勒（みろく）菩薩（鎌倉）、鵜川の四八体仏（室町）など、それぞれの時代にわたって、美しい作を見ることが出来る**〔かくれ里：石をたずねて〕。この内、狛坂廃寺の石仏・花園山中の不動明王は、磨崖仏として紹介した。

数ある近江の石仏の中で、志賀の大仏は、群を抜いて素晴らしい作である。大きいから？　古いから？　美しいから？　愛らしいから？　いや、そのす

▲志賀の大仏　巨大な花崗岩に半肉彫りされた阿弥陀如来。お顔に対して、胴体部がやや小さいため、ややアンバランスな感じがもあるが、像の前に座して拝すると、仏の大きな慈悲が、頭上から降り注がれるのを感じる。

このプレビューでは表示されない頁があります。

八　石塔寺石造三重塔
……風土に融け込む異国

近江の石造美術をこよなく愛した白洲正子であったが、石の美に目覚めるきっかけとなったのが、石塔寺石造三重塔との出合であった。**石塔寺へ最初に行ったのは、ずいぶんの前のことだが、あの端正な白鳳の塔を見て、私ははじめて石の美しさを知った**〔かくれ里：石をたずねて〕。そして、この塔の美しさを、**私は日本一の石塔だと信じている**〔近江山河抄：近江路〕・**特にみごとなのは石塔寺に建つ三重塔であろう**〔美しいもの：木と石と水の国〕と絶賛している。

この塔は、一見して日本の塔ではないと感じる。**寺伝によると、この石塔は、天竺の阿育王が、釈迦の供養のために塔を造り、その一つが日本へ飛来して、この地に落ちた。以来、地下に埋もれていたのを、いつの頃にか掘り出したという**〔かくれ里：石をたずねて〕、と紹介しているように、寺伝では、インドの塔としているが、明らかに朝鮮半島系の造形である。

近江は大陸、特に、朝鮮半島との関係の深い国である。大陸から日本海

▲石塔寺石造三重塔　我が国の石造三重塔としては、最も大きく、最も古く、おそらく最も美しい。残念ながら相輪より上は失われ、後補となっている。この塔に関しては青空がよく似合う。青空を背景にすっくと立つ姿は溌剌とした精気に溢れる。特に長い石段を登り詰め、空を背景に塔だけが映えた姿は、息を呑むような美しさである。

このプレビューでは表示されない頁があります。

著者紹介

大沼 芳幸（おおぬま よしゆき）

略　　歴

1954 年山形県新庄市生まれ。1982 年私立佛教大学博士後期課程中退。1983 年滋賀県教育委員会文化財専門職員採用、2011 年滋賀県立安土城考古博物館副館長を経て、2015 年より公益財団法人滋賀県文化財保護協会普及専門員。
2016 年 「琵琶湖八珍の取り組み」に対して博物館活動奨励賞受賞。

専門分野

琵琶湖をめぐる文化史を考古・歴史・美術・民俗・漁業・環境など幅広い視点から研究し、成果の普及活動を行っている。

主な著作

（単著）『琵琶湖八珍──湖魚の宴絶品メニュー』海青社、2017
（単著）『信長が見た近江──信長公記を歩く』 サンライズ出版、2015
（共著）『おいしい琵琶湖八珍──文化としての湖魚食』 サンライズ出版、2015
（共著）「琵琶湖沿岸における水田開発と漁業──人為環境がもたらした豊かな共生世界──」 吉川弘文館「環境の日本史 2」、2013

ほか

In the Footsteps of Masako Shirasu
A Contemplative Guide to the Spiritual Power Spots of Lake Biwa
Volume One: Southern Lake Biwa

by
OONUMA Yoshiyuki

白洲正子と歩く琵琶湖
（しらすまさことあるくびわこ）

江南編・カミと仏が融けあう処

発 行 日 ―――― 2018 年 1 月 15 日　初版第 1 刷
定　　価 ―――― カバーに表示してあります
著　　者 ―――― 大 沼 芳 幸
発 行 者 ―――― 宮 内　　久

海青社
Kaiseisha Press
〒520-0112　大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677　Fax (077) 577-2688
http://www.kaiseisha-press.ne.jp
郵便振替　01090-1-17991

● Copyright © 2018 ● ISBN978-4-86099-333-7 C0026 ● Printed in Japan
● 乱丁落丁はお取り替えいたします

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-86099-988-9（PDF）